

巻頭言

数えてみると、私が数学教育専修の大学院の学生を相手にするようになったのは15年前、大学が、現にその職にある教員を修士課程の学生として多量に受け入れ始めて間もないころであった。その頃、論文は提出せず単位修得修了というケースもあっていいのではないかと、教授会で真剣に議論されたことが思い出される。論文が合格し、2年で修了するのは、定員の3分の1くらいが妥当だと見積もる教官もいた。それが、2年のうちの1年は普通に現場で勤務してもよいという簡便な方式もとられるようになる。15年間の世の変化は大きい。私の意識も変わって、修士の生産量はもっと高めなければならないという上の声を聞いても、別に驚かなくなった。だが、大学院教育が、はたして、小学校や中学校の現職教員の資質を高めているだろうかという私の疑問は、むかしのままである。論文作成を中心にする修行が、音楽や美術や体育専修者の学びをゆがめてはいないだろうかと考えてしまう。それに、学校の日々の営みのなかで子どもに働きかけ保守していく、作法をともなった伝統のところは、修士論文のテーマになじまない領域だと思うからである。

教師の理想像を、国民学校の私の先生や、新制中学校3年の担任の恩師に求めると、学級や学校のよき営みのための修業に、「論文」作成という作業は入ってこない。何事かを論述すべく考究することと、教室の営みに精進することとの間には、かなりの距離があるように思うのである。

私たちの先人が、西洋で形成された技術や科学を学び、その内容を伝える日本語や記述法を教えるようになってから百数十年、戦後の変革から数えると五十年、いつの間にか、わが国で教えていることを、たくさんの外人が学びにくるようになった。外圧と形容するのは適切でないかもしれないが、ものの生産や輸出におけるように、大学院教育でもアメリカと競争させられる時代になったようである。研究の筋力で彼の国に並ぶには、研究者養成でも競り合わなければならない。好むか好まないかと係わりなく、修士や課程博士を、外国人留学生を含めて、大量に生産することが政策の一つになる。

思うに、日本の研究レベルを底上げするような論文の生産システムの建設と、生産力のあるテーマ群が模索される時に至っているのではある。

(板垣 芳雄 宮城教育大学)